

宮城県気仙沼市の今

2011年3月11日「あの日」から、大切な人・物を失った人たちは、「いつの日かきっと…」を胸に、復興のために日夜耐え忍びながら過ごしてこられています。私たち実行委員会は、当時卒業生が居住していた気仙沼を拠点に被災地応援活動を微力ながら行ってきました。この7年間の自然災害は津波被害こそないものの、噴火や地震、豪雨、浸水・豪雪など全国いたるところで起きています。その度ごとに心を痛めてはいますが、支援ができてないもどかしさを感じています。その中で、気仙沼との絆は細々ではありますが被災からやがて、8年を迎えようとしている今日まで続けることができます。これは委員会の活動に理解を示し協力してくださる皆さんの力があってのことです。感謝しています!!!

そこで、107号では、気仙沼の小野寺さんにお聞きした、「今の気仙沼の復興状況」をお伝えします。最初に小野寺さんの紹介です。

鹿折地区に住んで折られました。津波でお宅は全壊で、奇跡的に命は助かりました。その後鹿折中学住宅の仮説に入り7年間過ごしました。昨年7月に住宅を再建して鹿折にお住まいです。12月にクリスマス送らせていただいたプレゼントを災害復興住宅の自治会に届けてくださった方です。

現在の気仙沼鹿折の町の状態は、

3mの嵩上げ（土地の高さを上げる）が順調にすすみ、代替地を被災者に提供しています。鹿折地区（大型漁船が陸に乗り上げられた場所）の嵩上げはほぼ完了。河川には工事は済んでも開通はしていない橋が2つある。大型スーパーの工事はまだ続いている。災害復興住宅は建てられ、2284戸が入居。但し、家賃は所得に応じて決められてはいるものの、高くて入れない人もいます。また、元々の土地には戻れず、大替地では困るため地元に戻れない人や、避難した場所で仕事や学校が決まってしまう戻らない人もいます。特に海に近い場所については以前のような暮らしにめどが立たない人も多。道路や交通、住宅や施設については、8割がた復興は進んだ。しかし、大切な人を失った悲しみは変わる事はないと話してくださいました。

気仙沼教育委員会は…震災孤児・震災遺児の支援をお願いします。

小学校1年生から中学3年生までの震災孤児（両親ともなくされた）震災遺児（父母のどちらかをなくされた）は、気仙沼には40人おられるそうです。教育委員会の「担当者の方はこのようにおっしゃっていました。「子供たちは、自分たちを応援してくれている人がいることを実感することが、生きる力になるのです。平安女学院の方々がもし、支援して下さることになれば勇気つけられます。」どんな支援がよいかについては、お任せします。」

委員会でその方法について相談していきたいと思います。皆さんからの提案もお待ちしています。

「ボランティアとは何か」

災害が起これば、地元住民と共に、駆けつけたボランティアの人たちが活動している姿を目の当たりにします。ボランティア活動が当たり前として日本社会に定着しつつある中で、ボランティアとは何かを問い続けている高校1年の槇山さん。彼女は中学1年次から実行委員会に所属し、今回 JICA のエッセイコンテストで、「ボランティアとは何か」で優秀賞に選ばれました。その内容を一部紹介し、私たちの活動についても考えたいと思います。

私は留学前に団体の方から指摘された言葉を思い出しました。「自分のやりたいこと≠ボランティア活動」。今日出会った高校生たちの活動は私たちが団体の方に「セブでボランティア活動がしたいということですが、あなたは何かができますか？」と聞かれ「子どもたちと一緒に歌を歌ったり遊んだりしたいです」と答えたあの子の自分でした。

しかし今、私が考えていることは折り紙やけん玉などは支援を行う上でのコミュニケーションツールでしかないということです。現地の人々が必要とする支援を考えて進めることが、海外で活動するときに一番大切にしなければいけないことだと気づきました。また一時的な無償支援を与えるのではなく、必要なものを自分の力で手に入れる方法を伝えることが大切だと思いました。「自分がしたいこと≠ボランティア活動」の意味をこの留学を通し少し理解することができたと思います。

ボランティアとは何か？今はまだはっきり答えは見つかりません。しかし私はそれで良いと思っています。私はこれからもボランティアとは何か、支援を必要としている人々の気持ちに寄り添い、自分にできることは何か？と考えながら活動をしていきたいと思っています。



皆からの募金から靴下も買ってきました

中学1年生の委員たちが買出しに行きました。委員長の金本先輩と靴下を大量購入しました。こんなたくさんの靴下を買うことは先ず経験したことがなかったので、びっくりしました。

長野県の共同作業所に依頼したクッションを箱づめしたのは、高校1年生の委員です。一つ一つにメッセージカードを入れて袋詰めを行い、災害復興住宅にお住まいの方々にお届けしました。